

冬の終わりから春へ、そして秋へ(2)(写真)

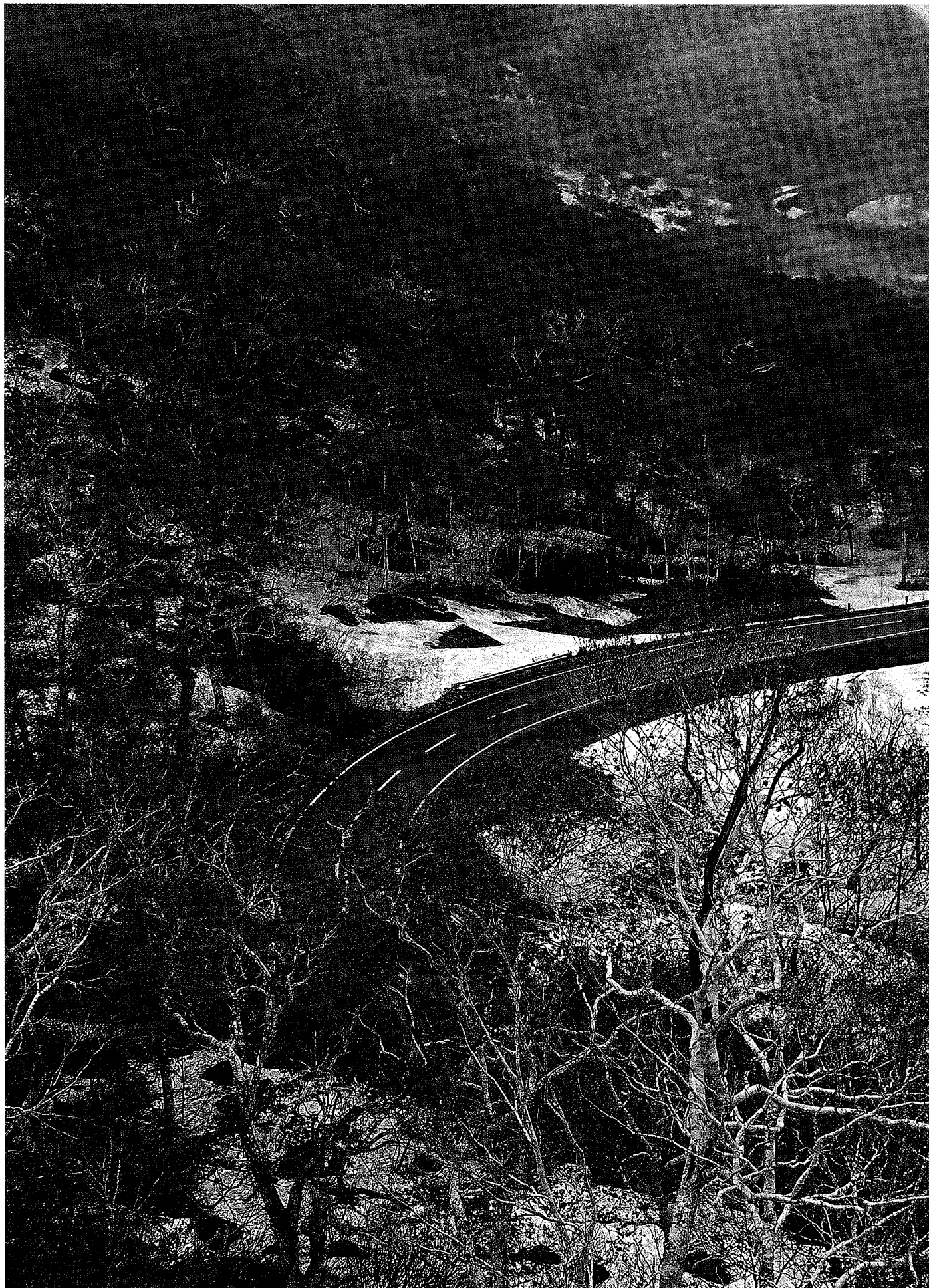
Late Winter through Spring until Autumn (2) (Photograph)

藤 原 等

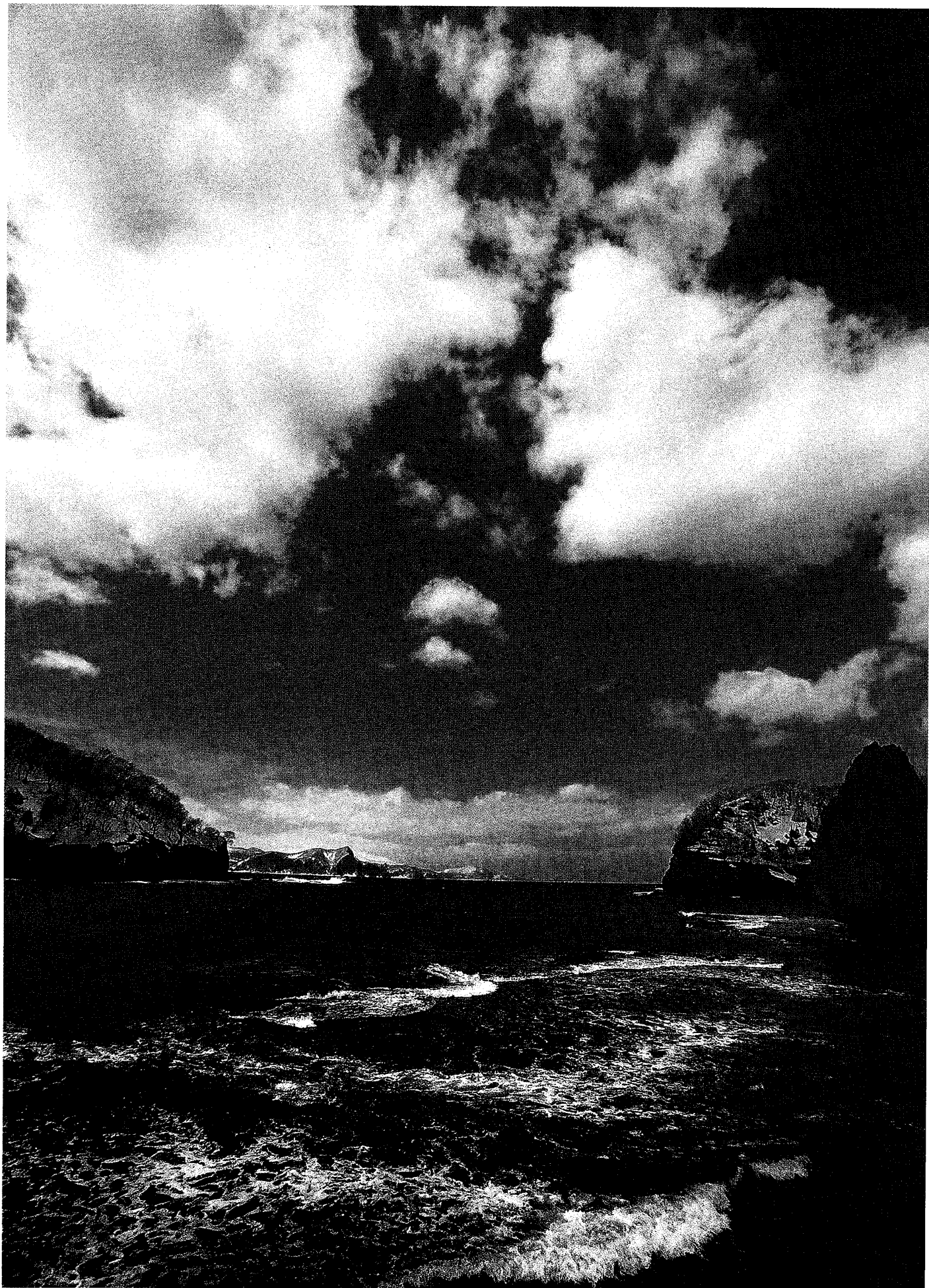
FUJIWARA, Hitoshi

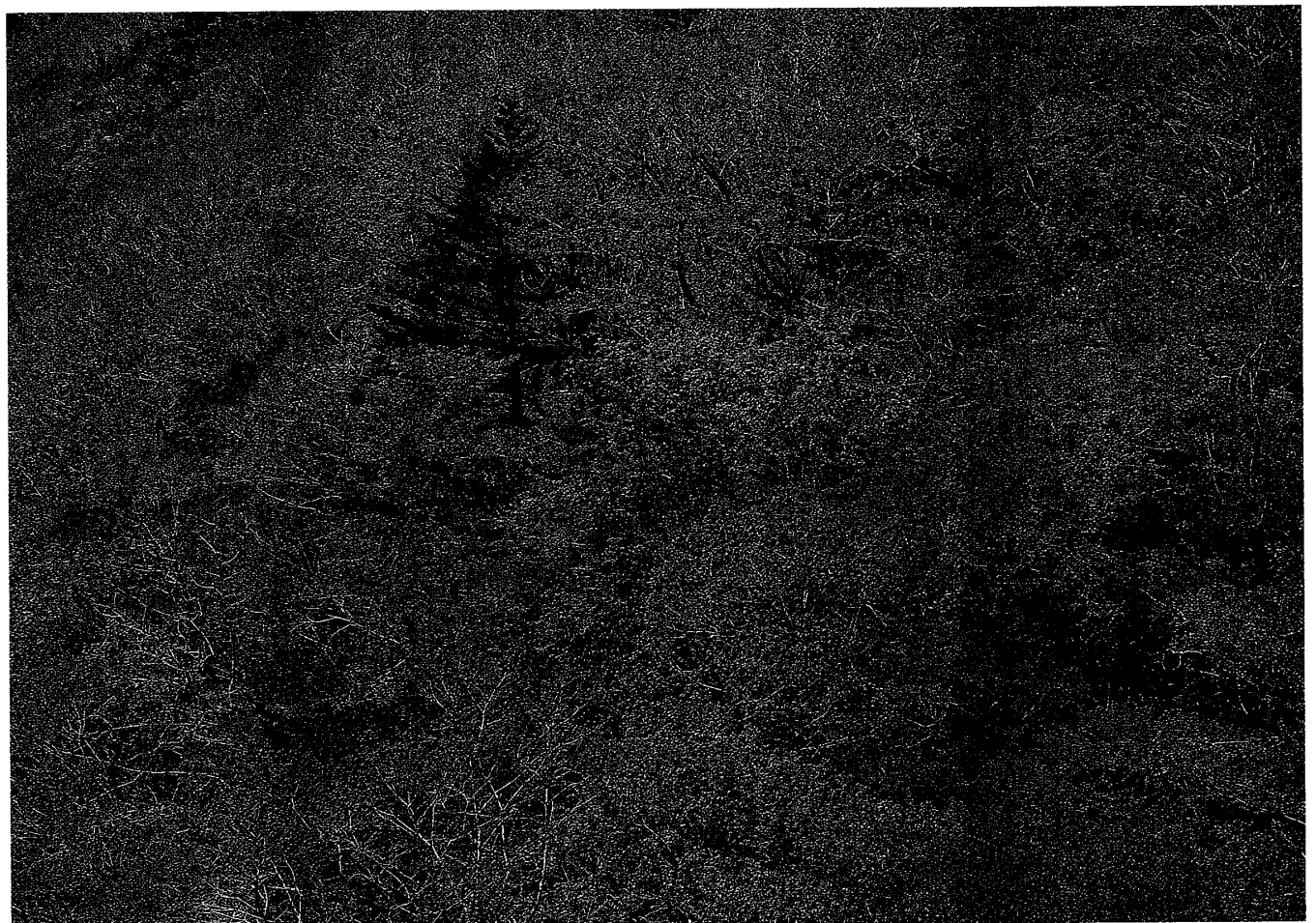




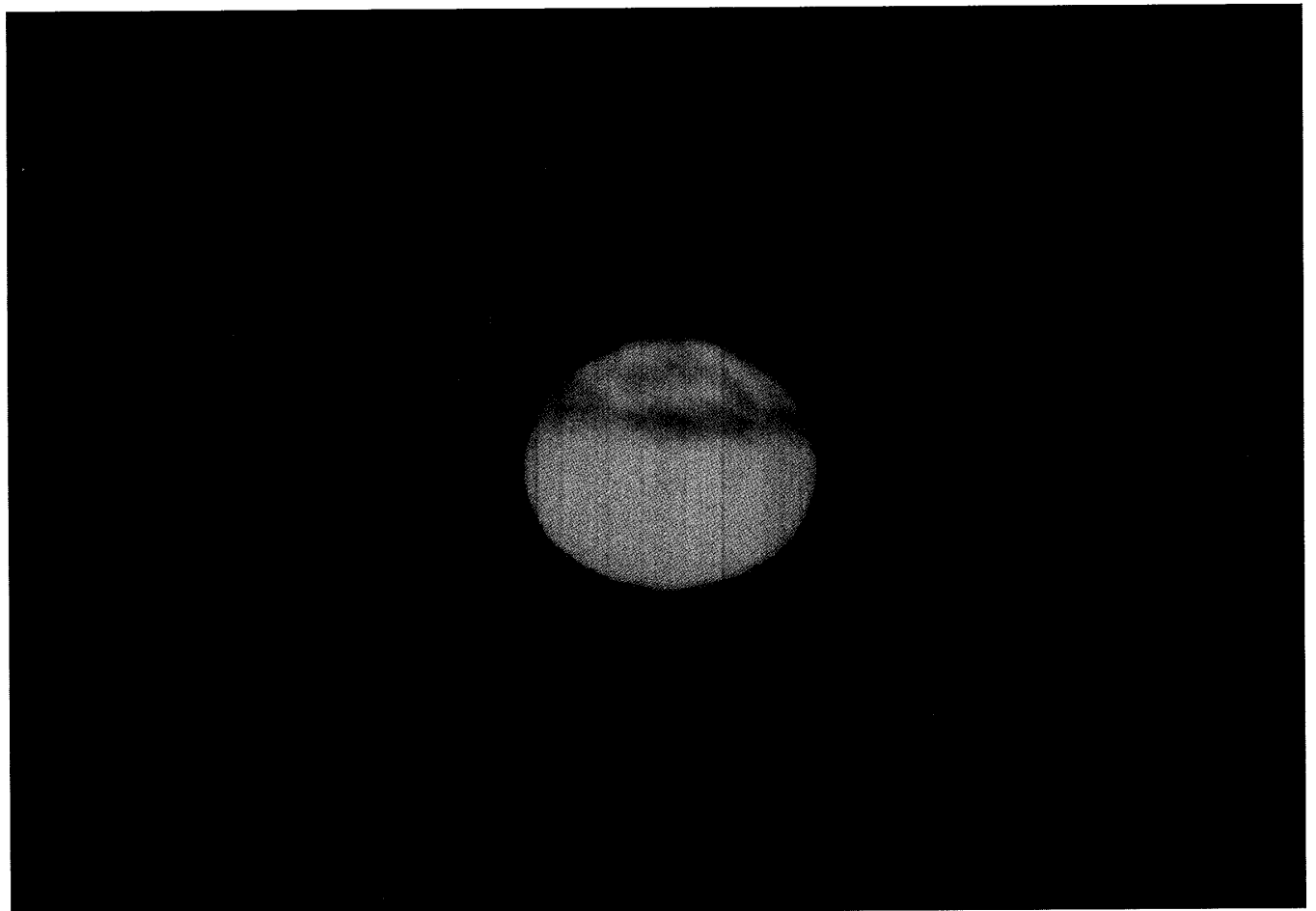
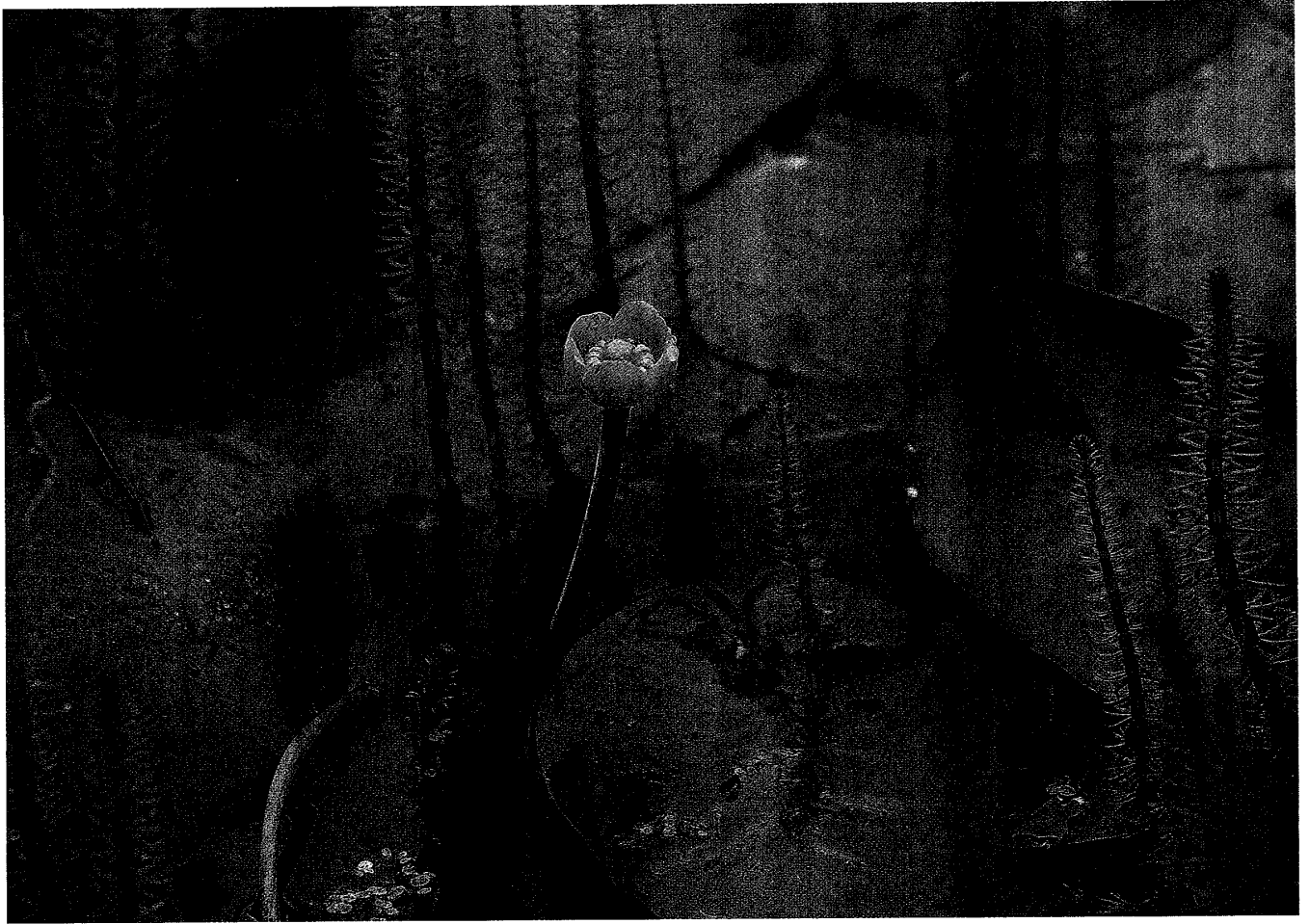


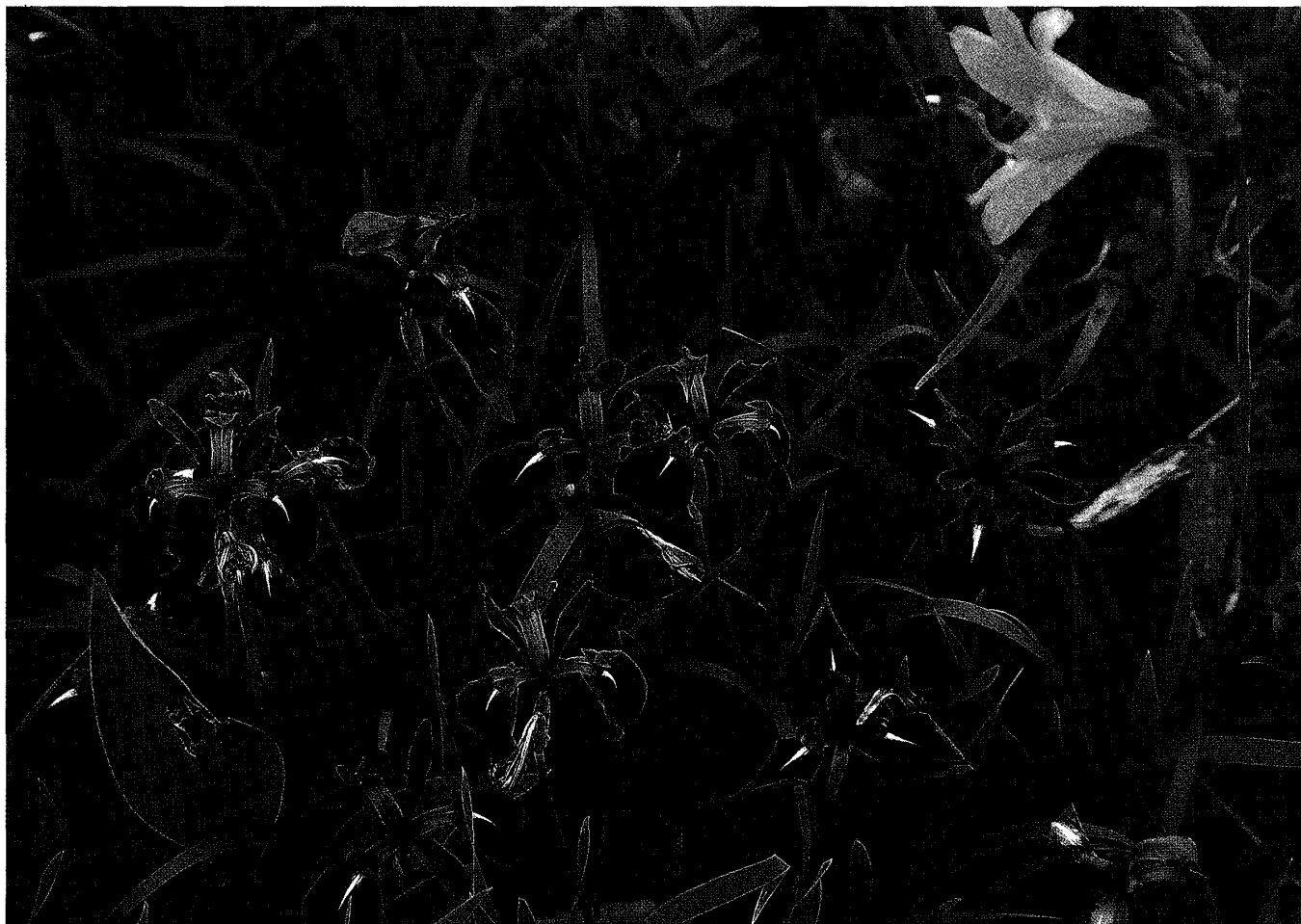


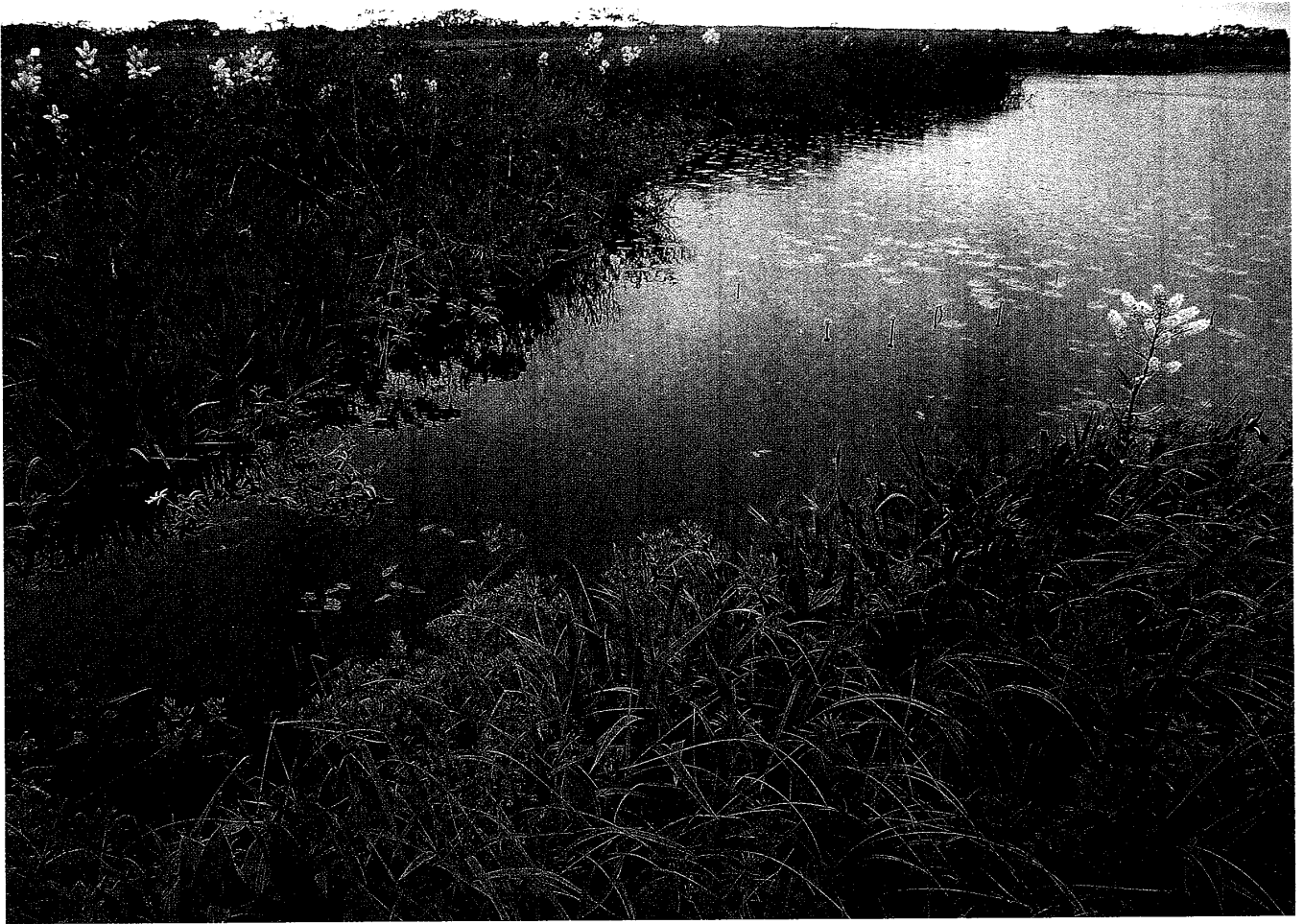




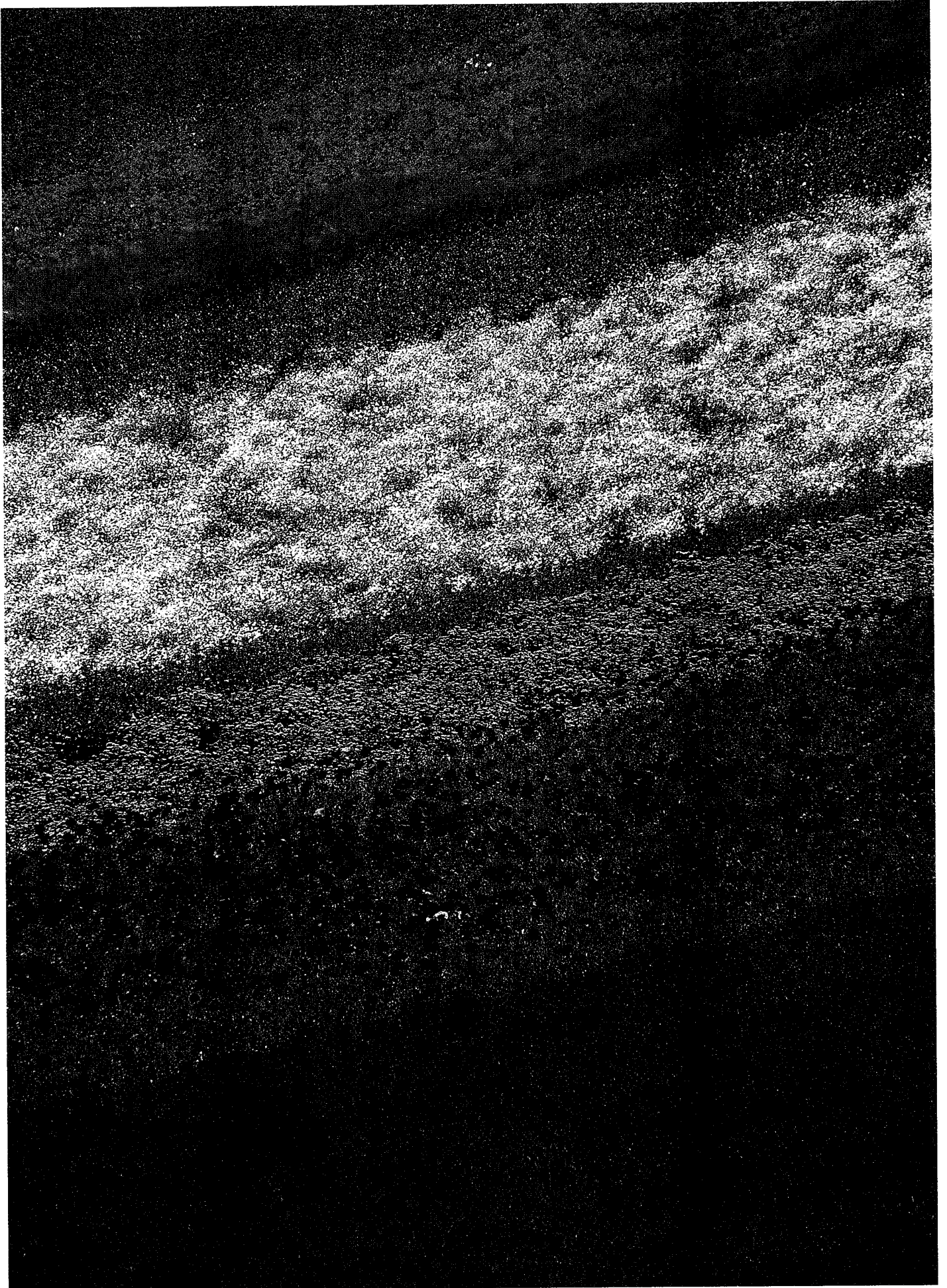


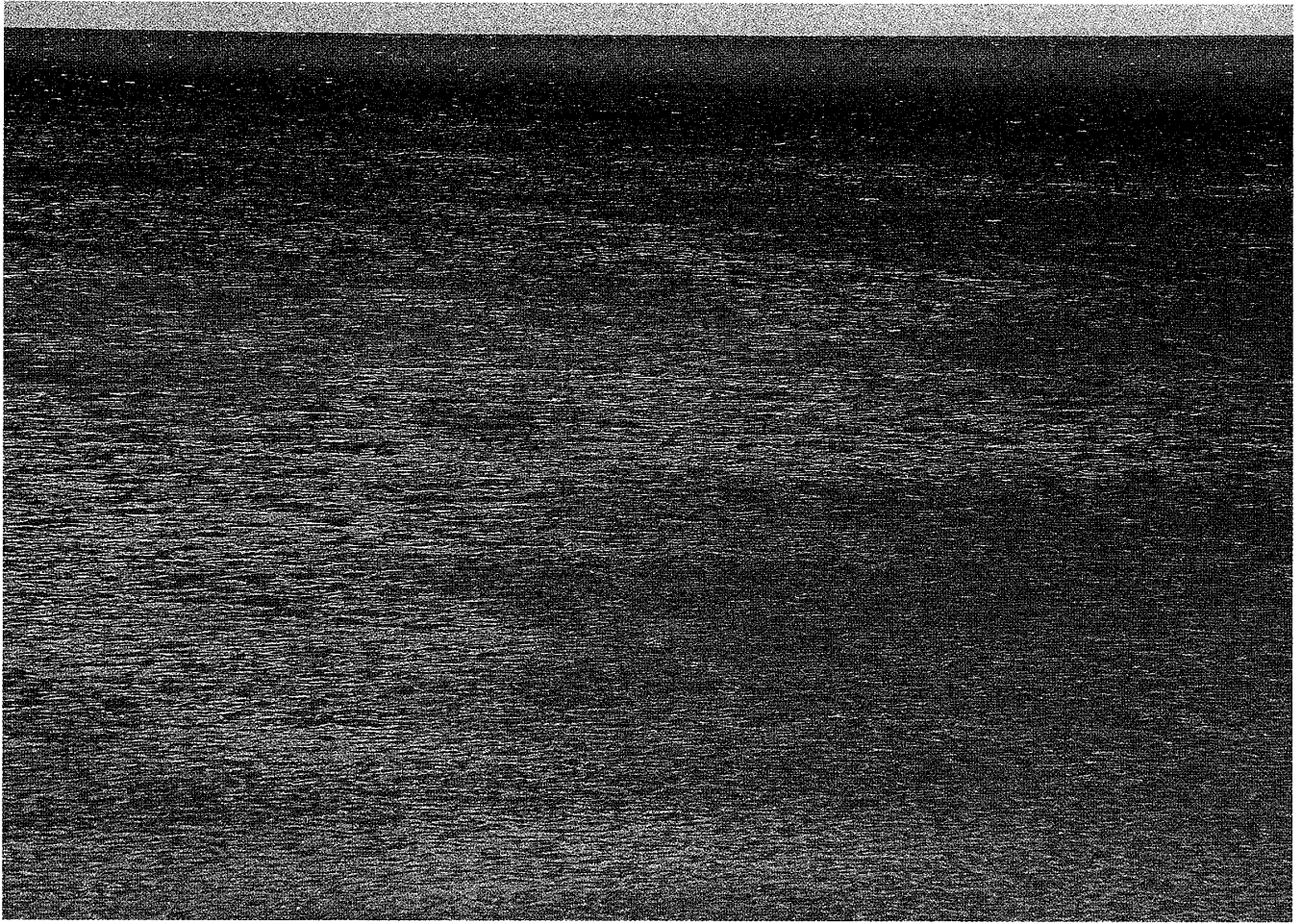


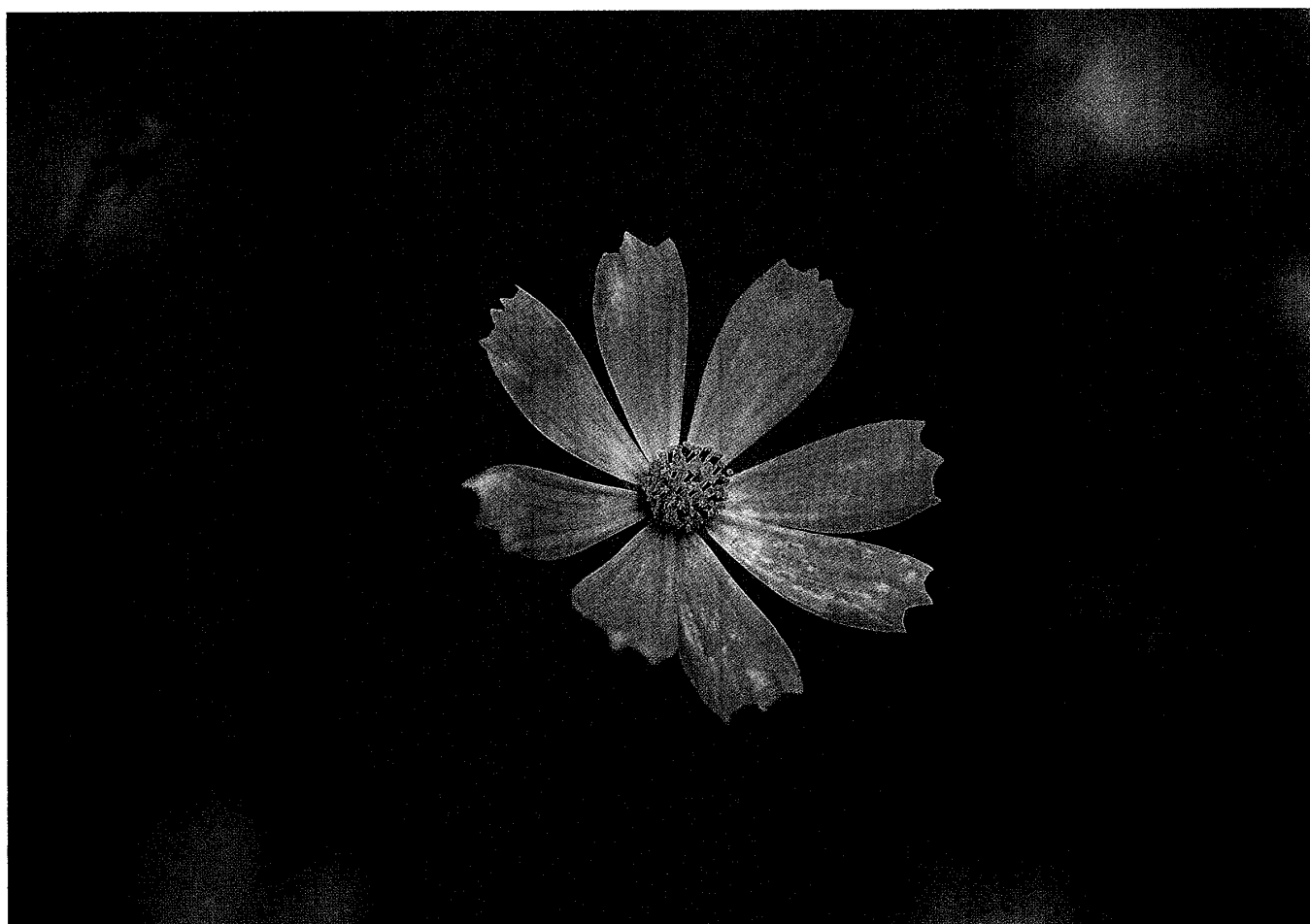
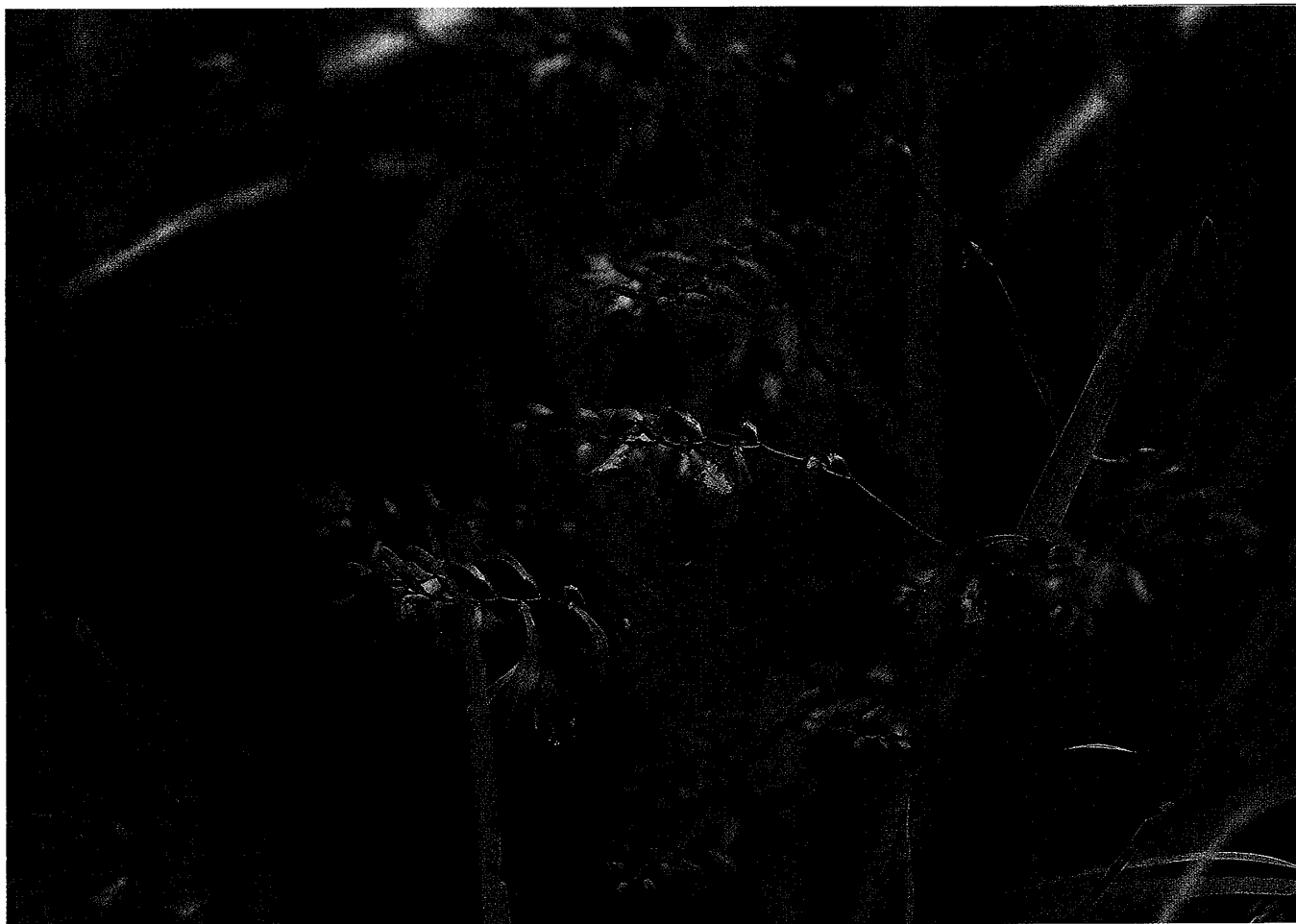














いよいよ、終わりに近づいている。命が終わりに近づいているかどうかは自分でもわからない。しかし死は必然である。生は偶然である。病を得て、懸命に治療に取り組んでいる。しかし、痛い。偶然得た生であるから、ボクには研究者、教育者以外の顔もあるのだという何とも欲ばりな面があって、こうして作品を発表している。こうした、本誌での作品発表ももう終わりだと言っているのだ。奇妙なものを発表して申しわけないとも思っている。

地球上に誕生した生物の種は平均すると約2,000万年生存するという計算を発表した研究者がいる。もちろん、一個体の生はそんなに長くは生きられない。親から子へ、子から孫へと生命は連続的につながり、ついには生物種として絶滅していくのだ。その期間が約2,000万年だと言っているのだ。何時、サルからヒトになったのかはなかなか困難な研究課題のようだが、さかのぼってアウストラロピテクス・アファレンシスのルーシーさんは最も古い人類の祖先であるとも言われている。約500万年から約550万年前のようだ。その後、湿原を歩く2足歩行の親子の足跡の化石も発見されている。これが家族の起源である。

乾板(湿板)から白黒フィルムへ、カラーフィルムへ、そしてデジタル写真へと変化している。坂本龍馬や土方歳三の写真が残っているのは、写真術の開発と乾板(湿板)が残っていたからである。わが国へスキーを伝えたというレルヒ氏の写真も新潟県の旧高田市に残っているし、近いところではニセコひらふ地区にある「ニセコレルヒホテル」に大きな写真が飾られていた。レルヒ氏の顔がわかるのも乾板(湿板)が残っていたからである(2006春、「ニセコレルヒホテル」は、オーストラリアバブルに飲み込まれ買収されてしまった)。乾板(湿板)からフィルムへというアナログは、湿原を歩く2足歩行の親子の足跡の化石のように運が良ければ後世の誰かによって発見される可能性がある。高松塚古墳の壁画のように。読解される可能性がある。ボクの理解が浅いのもかもしれないがデジタル写真の記録メディアは小さな破損でも復元は困難である。後世になって読解できないのではないかと思われる。

ボクの知人は写真業界の人である。彼が言うには、CDも含めてデジタル写真関係の記録メディアの寿命は約20年程度だと言っている。ボクは初期のパソコンの記録メディアにあの音声カセットテープを使用していた。ところが、現在、その記録されているはずの音声カセットテープを現在のパソコンでは読解できないのである。メーカーに紹介しても良い返事はない。写真業界の知人の話では、現在でもテレビ局などで保存用の映像にはアナログの業務用のVTRテープを使用していて、結構、一定の需要があり生産し続けなければならないのだと言っていた。ベトナム戦争の報道写真を撮りたいと考えているうちに病気になった。ベトナムに行っていたら流れ弾に当たってこの世には居なかったに違いない。今回の「冬の終わりから春へ、そして秋へ(2)」のシリーズの作品も撮れなかつただろう。日米安保条約批准をめぐる闘い闘って、ベトナム戦争の流れ弾で死んでいたはずの命である。こうして考えると生き永らえることも悪くはない。今回の「冬の終わりから春へ、そして秋へ(2)」の作品群はすべて2006年の撮影である。体力が落ちているのに機材は重いものを使っている。逆らっているのだ。空気感、風の匂いを撮影したいとも思う。今回もまた写真の選択に迷って、迷いがある。(06.10.3)